

# 老いゆくことの社会学

山岡 栄市

## 序

わざと進行形の名称を用いたのには若干の理由がある。よもやこの年齢<sup>とし</sup>まで生きのびられるとは思っていなかったが、名医との出会いにより、また周囲の人びとの温情に支えられて、いま八〇の坂を越えようとしている。一病息災をモットーとして長い間暮してきたが、先人がいつているように、人生のことも社会のことも「その年齢<sup>とし</sup>になつてみないとわからない」断面があるようだ。それと同じように「自分が体験しない」とわからないもの」もあるようである。例えば逆縁の悲しみというものである。他方、加年や体験の如何を問わず、科学・技術の進歩によって新しい知見を得れば、人生も社会もまた異なった角度からわれわれに反省と自覚を与えると思

われる。カメラその他の技術の向上によってわれわれが今まで知り得なかった生物界・人間界の状況、例えば未知の動植物の生態（NHK番組 ウォッチング）や秘境における人間の世界（同 アマゾン河や興安嶺等々）を知ることができる。このような新しい情報による知見の拡大は、われわれ人間社会に関する知的認識や情緒的理解を深化・発展せしめる契機ともなるであろう。

このように人間は年齢<sup>とし</sup>を重ねることにより（単なる生物的加年ではない）、またもろもろの体験を重ねることにより、あるいは現代社会における科学技術の著しい成果を享受することによって、異なった角度からの社会的知見に導かれることがあるように思われる。敢えて進行形をとり「老いゆくことの社会学」と題した次第である。

## 第一節 日常性の再発見

夏の朝、起床と同時に雨戸を開ける（年中午前六時である）。おいしい空気が何ともいえない。花壇のハマナスに花数輪、季節毎に色の変わる珍らしいモミジの葉っぱも今は緑。五分間のラジオ体操が終わると「今日も一日生きるのだ」との活力がわいてくる。一日中いろいろのことがあってやがて雨戸をしめる。毎日同じことを繰り返している。「ああこれが人生だ、社会というものだ」とつくづく思う。元気でいる限り毎日同じことを繰り返すが、これが出来なくなったらとき人は病むのであろう。ともあれ同じことの繰り返し……そこに生の反覆があり、そこに社会の継続がある。周知のように、社会学者タルド（G. TARDE, 1843～1904）は社会的反覆を以て模倣となし、「社会は模倣である」（La Société, C'est l'imitation）とした。

雨戸の開閉を毎日繰返し、三度の食事を取り、起きている間は何らかの人間関係のなかで生きている訳であるが、時として思うことは「いつまでこの雨戸の開閉ができるのであるうか」という一事である。反覆は平凡なことではあるが、万

一（それは近い将来に必ずある）それが不可能になったときは即ち私にとって異常なこと（病氣、死）となるのである。この平凡な事を思うようになったのはやはり七〇歳台も後半の、ここ数年来のことである。若い頃にはそんなことはあたりまえのことであり、とりとめて意識にものぼって来ないような日常茶飯事である。日常性というものはそれが社会というものの基底をなしているのであるが――空気や水のように生にとって基本的な、そして形のない社会的身体を形づくる要因なのである。

わたしが昭和一〇年（1935）東京に遊学の頃ある文学研究会の席上で、横光利一（1898～1947）が「日常性に飽きない奴はよっぽど頭が悪いのだ」と語気荒く語っているのを聞いたことがある。「日常性つまり道德と、理性つまり自意識のうち何れを上に着くべきか？　これ一つを解決できたら大したものだ」とも語っていた。若き文学者横光にとって日常性は超克さるべきもの、自意識はそれを超克し生を前進せしめる活力であると考えられたのであろう。同じ頃若き哲学者三木清（1897～1945）は「倫理における格率性と創造性」について述べたことがあるが、その格率性というのは生の歩みを規制する客観的な力――つまりは日常的なノルムであり、創造性とはそれを超克し生を前進せしめる主体的革新力を意味し

たものであろう。当時流行した実存主義哲学者ベルグソン(H. Bergson, 1869~1941)のエラン・ヴィタル(élan vital)も、そのような生の躍進力を指すものと思われる。

横光利一も三木清も当時まだ四〇歳前後の若さである。若さや英才は日常的なものを越え易い。各人の暦年齢や人生経験、あるいはライフステージによって日常性は異なる意味をもって来るようである。いま私はここで社会的日常性の構造や機能を分析する用意を持たない。ただ人間は老年期に入ると、日常性のわかり切った一断面を通して人生とか社会というものを、ある種の感懷を以て受けとめるようになるのである。それは今まで気付くことの少かった、例えば上記の雨戸の開閉という小さな一つの行為さえ、若干の身体的抵抗なしにはできなくなる事態(老衰、病氣、そして死の予感)に直面するときにおいてであらう。

季節の移り易りに対して敏感な人びと、例えば俳句や園芸を趣味とする人びとは、地位・年齢の如何を問わず大自然の運行―その偉大なる自然界の反覆に驚ろくであらう。ところで老人期に入るとすべての人びとが、その同じことを、生きとし生けるものの芽生え(生誕)↓生長・開花(成人)↓結実・再生(老・死・継承)という生成流転の相において実感するのである。

この反覆・再生の姿は大自然においては自らにして展開し行くものであるが、われわれ人間が形成している世界(社会)では必ずしもそうではない。価値観の変動の少ない社会では、社会的蓄積としての文化がいわゆる伝承ないし伝統の形で世代を超えて反覆・継承される。しかし今日のような著しい科学技術の発展とそれによる社会的変動の急速な社会では、反覆という機能は次第にその勢力を失い、むしろ変異(発明・発見・創造・流行・個性等々)の魅力が社会を牽引する。その目ざましさに今日の高齢者層はついて行けないのである。それは単なる世代差ではない。今日では同じ世代間でも僅か五〜一〇年の年齢差でその抱く価値観や行動パターンを異にするほどである。

このような状況が家族、地域社会、企業社会の人間関係において、さらにまた一般社会人の日常生活においても顕著に露呈され、価値観の多様と相剋に神経を使わざるを得ないのが現代社会人、わけても高年齢層の人びとである。この層では伝統的反覆(社会的継統)よりも、それとの亀裂を感じる事が多い。

## 第二節 老人における連帯性

人間生活の連帯の方向に二つが考えられる。

### I 空間的地平

### II 時間的久遠

若い時代はその身体的エネルギーと旺盛な欲求によって行動半径が大きく、その生きる方向は概して空間的地平に拡大する。わが国の経済発展が著しい今日、経済人はいうまでもなく政治家、研究者、文化人等の活動は著しく国際化してきた。一般民間人や若い世代の人びとの外国渡航や留学が急速に伸びるとともに、外国人の来日も顕著に増加した。社会的連帯の絆は一挙にグローバルな地平に拡がり、まさに国際化・宇宙化時代に突入した。

他面、多くの職業人は停年を迎えると同時にその活動範囲の縮小を余儀なくされる。その多くは、かれらにとって第二の郷里ともいふべき大都市近郊の住宅地や都心のマンションで生活する。(一貫して生れ故郷に住む人もあろう)。そこで更めて彼等は自分の生れ故郷を思い、さらに今後そこで老後を過ごし、そこで骨を埋める第二のふるさとに思いを寄せる。通勤あるいは現職時代を通じて長らく無縁であり、また意識

的に避けてきた地域との連帯というものに気づくのである。だが、それが本当に身も心も托し得る静かで安らかな世界であるかといえば、必ずしもそうではない。いわゆる「家郷の喪失者」の一人であることに気づくのである。地域との連帯を求めてたとえば「老人会」・「趣味の集い」に参加する人は半ばにも充たない現状である。栄光の現役時代に比べるとその空間的連帯の絆は極度に縮小され、旧知の死亡とともに孤独感は深まって行く。「老いゆく自己」の実感とともに、いわば時間的久遠との連帯に移行する。過ぎ来し自己を回顧しまた行く末を思うようになる。日本人の平均寿命が高くなったといっても、この層の人びとにとっては大した意味はない。「あと何年生きられるであろうか?」と年齢を重ねるのではなくて、「あと五年、あと三年……」と消去して行くのである。一年が、一ヶ月が、いや一日がまことに貴重なものとなって来るのである。老人は「ただ呑気にわがままに暮している」のではない。あの戦争体験と、戦後の著しい社会変化とそれに伴う価値観の変化に由来する生活上の緊張感。それは旧制度下における老人層の味わい得なかったものである。

回顧的になるのは老人の常であるが、その生活リズムが空間的地平から時間的久遠に移行する過程で、現代の老人層は格別に、自己の生の原点である幼時の生活を思い戦争中の苦

難を偲ぶのである。そして自己の体験を綴る、自分史（自叙伝）の執筆に動く。たとえそれが一凡人の生活記録であっても、また子や孫がそれを読んでくれなくとも、とにかく人間としての生の軌跡を書いて残したいと想うのである。かつては老人の昔話（幼少年時代のくらしや苦労話等々）に子や孫は耳を傾け、何回となく同じことを素直に聴きながら大きくなった。そこに老人に対する敬愛の情も培われ、一家団欒の睦みも体認された。また伝統的な価値観や生活の仕方の継統もあった。いまはいたるところにズレと断絶がある。このような状況のなかでせめて自己の生涯の軌跡を書き留めたいと思うのは極めて自然なことであると思われる。

時間的久遠との連帯は必然的に宗教的世界への開眼につながるものであるが、この問題は余りにも大きく、ここで触れることを差しひかえたい。

### あとがき

最近感じていることの一端を、社会学上の二つの概念―日常性と連帯性―に結びつけて書いてみた。「老いゆく者」と自己規定することに問題があるかも知れない。编者からの執筆依頼をすっかり忘れていて、僅かの時間に書き流したもの

で杜撰きわまりなく、読者・编者に心からおわびを申し上げるものである。

（平成一、二、一一）